

## はじめに 同性愛をめぐる二つの「自由」

日本が同性愛文学の宝庫だというのは夙に知られたことだろう。岩田準一<sup>※1</sup>の労作『男色文献書志』<sup>※2</sup>は、記紀にあるような、解釈次第でどうとも読める怪しげな記述は排し、はつきりと同性愛について語るものとして、『伊勢物語』から昭和初年までの、優に千を超える文献を列挙する。岩田はまた、『本朝男色考』<sup>※3</sup>では、日本の男性同性愛一般の歴史を披歴した。同性愛は、現在のBL（ボーイズ・ラブ）のような文学上のフィクションとしてばかりでなく、現実の生活文化としてあった。

同性愛に関して途切れることのない一貫した通史が描けるといえるのは、日本文化の一つの特徴と言っているだろうか。ゲイリー・P・リューブは、『男色の日本史』<sup>※4</sup>という書物を、「なぜ日本に

は、古代ギリシヤとならぶ同性愛文化が花開いたのか」という驚きをもって書きはじめている。しかし、ギリシヤの場合は「古代」に限定されるが、われわれの同性愛は古代から綿々と今にまで至る「日本通史」を記せるのであり、たんに「ならぶ」というレベルでないのは明らかだ。

ただ惜しむらくは、岩田の『本朝男色考』の本編は室町時代で終わり、リューブの『男色の日本史』は基本的には江戸時代の考察に終始している（原題は“Male Colors: The Construction of Homosexuality in Tokugawa Japan” すなわち『男色——徳川時代の日本における同性愛の構造』であり、邦題はいささか風呂敷を広げすぎたきらいがある）。とすれば、誰かがその後を継ぐべきで、本書がそれを指すべきということにもなるが、ただことはそれほど単純ではない。両書の延長上に、日本近代の同性愛史を単線的に引き伸ばすことは不可能だ。日本の同性愛は、近代化・西洋化に伴い、とりわけ大正期から戦後にかけて、それまでにない大変革を経験したからである。

それは、たとえば茶道が、生活の西洋化に伴って茶室から外に出てテーブルと椅子の立礼ちゅうらいを生み出したというような、ある一つの文化事象の内部での作法や慣習の変化といったレベルにはとどまらない激変であった。その文化自体がまるごと葬り去られようとしたのであり、その抑圧を潜り抜けるために、同性愛を生きる者たちは自らの立場や認識の変化を迫られた。

「同性愛者」という新たな枠組が生まれるとともに、その名で名指される人々がその内部に囲い込まれ、「異常」の烙印を捺され、陽の当たるところから周縁へと追いやられるようになったと

いうことだが、事情の複雑さはたんなるこの価値の転換だけにあつたのではない。「同性愛者」という負の価値を持つものとしてはじまつたカテゴリーは、そこに括られる側の人間たちによつて積極的に選びとられたところもあるのだ。

その流れの上に現在の「LGBT」や「SOGI」<sup>※5</sup>があり、「同性愛者」たちが胸を張つて生きることでできる社会の構築が喫緊の課題としてわれわれの眼前に置かれているが、ここで目指されている自由は、「同性愛者」が現れる以前の自由と同じものではない。「同性愛」という指向や行為にそもそもなんの蟠り<sup>わたかま</sup>も感じていなかった際の〈自由 freedom〉と、「同性愛者」としての権利の獲得、抑圧からの解放という意味での〈自由 liberty〉とは、似て非なるものだ。

この二つの〈自由〉の差異は、たとえば同性愛におけるような「常識」が昔と今とで異なる、といった単純なものではない。同性愛の場合、われわれは、古典文学で描かれる恋愛をどれほ

※1 竹久夢二に師事した画家にして、男色文化の研究者。江戸川乱歩や南方熊楠と研究上の交流を深め、乱歩の『パノラマ島奇談』などに挿絵を寄せた。明治三三（一九〇〇）年〜昭和二〇（一九四五）年。

※2 歿後、昭和三一（一九五六）年刊。『本朝男色考 男色文献書志』原書房、二〇〇二年

※3 歿後、昭和四八（一九七三）年刊。『本朝男色考 男色文献書志』原書房、二〇〇二年

※4 『男色の日本史——なぜ世界有数の同性愛文化が栄えたのか』作品社、二〇一四年。

※5 Sexual Orientation and Gender Identity 性的指向と性自認。

ど称揚しようと、それをわれわれ自身のものとして見ることは決してない。もし彼我を地続きと考えているなら、政治家やタレントの不倫を激しくバッシングする社会が、『源氏物語』を称揚することはできないはずだ。物語中で最高の政治権力者でありアイドルであった光源氏が、現在において同じ地位を保てる可能性は皆無だろう。われわれは異性愛に關するかぎり、過去と現在のダブルスタンダードを保持しつつ、それを疑うことはない。古典における恋愛は、われわれにとつてははつきりと異文化である。かつての恋愛を自由と捉えたとしても、それをそのままの世に甦らせようとする表立つた動きはない。

しかるに同性愛に關しては、ある時には過去のそれを恥すべきものとして隠蔽しようとし、またある時には昔はよかつたとはかりに懐古するばかりでなくそこへ戻ろうとする。いずれの立場をとるにせよ、じつのところ同性愛はあいまいなまま現在と地続きなものとして捉えられている。それはもちろん、古典の恋愛作法がそれと連動していた結婚制度などとともに亡びてしまつたのと異なり、同性愛は今なお生きつづけているからだ。だからこそわれわれは過去の同性愛をも今の自分の感覚で測つてしまいかねない。

繰り返せば、「同性愛者の自由」とは別の「同性愛の自由」があつたということ。世界が「同性愛者の自由」を目指す中で、かつての日本にあつた別の可能性を知ることが、運動に行き詰まりが生じた時に別の途<sup>みち</sup>を見出すきっかけになるのではないか。

そこまで望むのはいささか欲張りだとしても、近代の同性愛文学が複雑に織りなしてきた文様を辿り読み解くのは、少なくとも日本文学の一つの豊かさを味わうことにはなるだろう。なにしろ、逍遙からはじまり、鷗外、漱石、武者小路、志賀、芥川、太宰、川端、三島……と、文学史でまずはじめに名前の挙がる錚々たる作家たちがこぞって、同性愛について書いているのだから。もしここで、三島以外の名に驚きを感じたのであれば、それは文学史においても長らく同性愛が抑圧され周縁に置かれてきたからだ。そこから自由にならなければならないが、三島由紀夫において、〈自由〉の意味は変わる。三島において「同性愛」と〈自我 *identity*〉の問題が結びつくようになるからである。これから豊饒な日本近代の同性愛文学の領野に分け入るにあたって、〈自由〉と〈自我<sup>アイデンティティ</sup>〉という二つのキーワードをつねに頭の片隅に置きつつ系譜を辿っていただければ、と思う。

SAMPLE

目次

はじめに	同性愛をめぐる二つの「自由」……………	(1)
序 章	問題と方法——日本の同性愛文学と「LGBT」……………	1
第一章	「同性愛者」以前……………	23
第二章	「同性愛者」の誕生——三島由紀夫という分水嶺とその後……………	69
第三章	女性同性愛の文学……………	103
第四章	間奏 稲垣足穂と森茉莉——二つの抽象……………	167

第五章

同性愛文学の現在、あるいは「同性愛者」後の  
同性愛文学の可能性について

189

終章 新たな「自由」へ

243

おわりに

259

引用文献一覧

267

年表

271